



大本山永平寺



長月の時節に

九月になると、山内は急に慌ただしくなります。下旬の一週間に、「御征忌」と呼ばれる大きな行持が行われるからです。

この行持は、毎年この期間に、ここ永平寺を開かれた高祖道元禅師のご供養を行います。そして、準備のために、修行僧だけでなく指導する立場の役寮、更には本山技術員の方々まで一丸となって境内地の清掃をはじめ、日頃使用していない部屋の掃除や障子紙の張り替え、また山内は大煤払いをして、特別な飾りつけを行います。

そしてこの期間は、日本中から多くの僧侶も集まり、一週間の特別な行持をつとめます。

特に朝課の時には、法堂はうどうの中が墨染めの衣と木蘭色の衣の僧侶でいっぱいになり、全員が、心と声の一つにして朝のお経をお唱えします。その際には、現在ここで修行中の者も、そうでない者も一切違いはありません。皆が道元禅師への報恩の気持ちを持って行われるこの情景は、七五〇年以上脈々と受け継がれてきた、変わらないこの時期の永平寺の朝の姿なのです。

この行持が終わると永平寺では、朝夕、少し肌寒さを感じるようになって、秋の気配が感じられるようになります。



大本山總持寺



門前とどろ節

今月はお彼岸の時節。總持寺では二十日から二十六日のお彼岸期間中、毎日午後一時から法話・引き続き二時から施食会法要が行われます。特にお中日の二十三日は江川禪師が大導師を務められ、大祖堂は参詣の檀信徒で溢れんばかりになります。

また月始めの二日には、總持寺のふる里である石川県輪島市門前町より、門前中学三年生たちが修学旅行で總持寺を訪れます。そして大祖堂で門前とどろ節（輪島市指定無形文化財）を御開山・瑩山禪師へ奉納いたします。

門前とどろ節は、かつて總持寺が能登に在って輪番住職制度を敷いていたころから伝わる唄と踊りです。輪番住職が一年の任期を勤め終え郷里へ帰るときに送別の宴で唄い踊られたもので、七〇〇年もの間、その伝承を保持してきました。

「はあー ぜんざいぜんざい」

響く鐘の音 千歳にこめて 町の誇りを寺でもつ」

という歌詞は聴く者の心を揺さぶり、任期を終えた輪番住職の喜びと安堵感が彷彿とってきます。「ぜんざいぜんざい」という囃子は仏教語の「善哉」に由来し、諸願満足を意味します。門前中学生の總持寺訪問は、横浜鶴見と輪島門前の絆を深める善い機会となることでしょう。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

狂ひなきごふうじゅうらう五風十雨の植田良し

岩手県 上沖 貞子

評 五日に一度風が吹き十日に一度雨が降る。気候が穏やかで豊作の兆し。世の中が平穏であることを云う。「狂ひなき」に農の順調を喜ぶ気持ちがある。リズムも良い句。

点滴ゆやけの夕焼の粒となりにけり

岩手県 鈴木 道昭

評 点滴の血中濃度が計算されているため、ゆつくりぼつぼつと我が腕にそそがれる。長い時間の経過を点滴が夕焼色に染まると表現。淡々とした味わいの一句。

◆街角に山車だしを休ませ宵を待つ 宮城県 小西 力子

◆田植終へまた出稼ひぎの仕度かな 岩手県 菅沼 正子

◆忙中のひと日の帰依ひや涅槃寺 静岡県 小泉八千代

◆次次に植田となりし日曜日 山口県 糸山 栄子

◆夏川や此処らあたりに替女こせの宿 神奈川県 小橋 幸

◆夏茶碗織部の井桁一筆で 新潟県 森村 ひろ

◆たつぷりと水なしまして茄子植ゑる 長野県 下島 博

◆江戸っ子の系よむらむら祭の血 東京都 伊奈 三郎

◆更衣八千草薫歳とらず 秋田県 小田篤恭葉

◆真っ白な日傘ひとつの渡し舟 大阪府 柏原 才子

*選者吟

老人に老犬添はせひぬ鯨はせの竿

五灰子

*作句小見

私の名前、五灰子の読み方は？ のお葉書を頂戴しました。「ごばいし」と読みます。若いころ身体が弱く友人から君は五体灰になるまで、と冗談を言われその俳号にしました。それからは少しだけ運が上向いたような気がします。私事ながら。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

難病の孫鬪病の床とこにいて料理の本とレシピ
を集む

長野県 太田 舛次

評 鬪病にもめげず明るく未来を見つめるお孫さんを作者は誇りに思っている。下句の簡潔な表現に信頼感が漲もたる。「料理の本とレシピ」から女性らしい華やきも感じられ、明るい予兆に満ちた一首である。

はたらいて食くって眠れば差し引きの時間は
わずか山頭さんとう火読かむ

長野県 毛涯 潤

評 生活してゆくために費やす時間を除くと残された時は何と少ないことだろうという嘆きが伝わってくる。句作に没頭できた山頭火への共感と憧れが伝わる。

◆山いつか一色となり青胡桃育てし水を蛇渡りくる

宮城県 鎌田登喜子

◆まああるい小石を両手でくるんでじつと見るどこにも角無
きまああるい石を

福岡県 森 信成

◆毎日が祭と毎晩一台の酒を愛して義父旅立ちぬ

宮城県 須藤智恵子

◆隧道ずいどうの開きて峠の地藏尊詣でる人影まばらとなりぬ

長野県 那須 幸美

◆救急車のけたたましき音遠のくを待ちいしカラスゆるく
羽ばたく

埼玉県 阿部百合子

◆昨夏の蟬のぬげがら付きしまま五月の風にシヤガの葉ゆ
れる

大阪府 西口 節子

◆着古しの母の着物とひなたほこあの声あの笑みわれを包
めり

宮城県 小田島麻利

◆「いいんだよそういうことは誰もある」聞えくるよう
菩薩の微笑に

静岡県 青山 清子

◆木曾谷で見かけし酒の「ナンチャラホイ」思わず歌う夫
も木曾節

茨城県 太田 弘美

◆山峡の沼のごとくに鎮もりし水張田真白き山脈映す

山形県 多田 さよ

*選者詠

余剰なるものとし出でくる水滴のつよきき
らめき夏の葉先に

ちづ

*作歌小見

鎌田さんの作品、山の神のような蛇の存在がしなやかで優雅で何とも美しい。結句「渡りゆく」となさったほうがよかつたか。神は異界の存在としたいと思う所為ですが……。毎月、皆さまの投稿歌楽しみに拝見しております。